

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要 書

論 文 題 目

日本語学習者の発音に対する自信の実態  
—自信の変化の様相と口頭コミュニケーションに対す  
る意欲との関わり—

樋口 友香

2023年 3月

本研究は、日本語学習者の発音に対する自信がどのように変化してきたか、変化した場面や変化の要因に着目して、発音に対する自信の実態を明らかにした研究である。さらに、日本語学習者の語りから発音に対する自信とコミュニケーション意欲との関わりについても考察を行い、日本語音声教育および日本語教育において、日本語学習者が自分の日本語に自信を持って日本語で口頭コミュニケーションを行っていくための実践、研究を行っていくために必要な示唆を述べた。以下、本論文の流れに沿って概要を述べる。

## 第1章 序論

第1章では、本研究の「研究背景」、「研究目的」、「本論文の構成」について述べた。

はじめに、なぜ本研究を行うに至ったのか「研究背景」を述べた。本研究を行うに至ったきっかけは、発音に対する自信をなくしたことによってコミュニケーションを行うことに対して消極的になった留学生と出会った経験から、日本語学習者が発音に自信を持って口頭コミュニケーションを行うための日本語音声教育・日本語教育を考えたいという思いが生まれた。そして、そのためにまずは、日本語学習者の発音に対する自信に着目してその実態を明らかにすることが必要であると考え、本研究に至った。

次に、本研究の「研究目的」について述べた。本研究の目的は、日本語学習者の発音に対する自信の実態を、その変化の様相や変化の要因を中心に明らかにすることである。それとともに、発音に対する自信と口頭コミュニケーションに対する意欲の関わりについて考察する。そして、日本語学習者が自分の日本語に自信を持って日本語でコミュニケーションを行っていくための教育について研究・実践を行っていくために必要な示唆を述べることを目的とする。研究目的を達成するため、本研究は以下の3つのリサーチクエスチョン(以下、RQ)を設定した。

RQ.1：日本語学習開始から現在まで、日本語学習者の発音に対する自信はどのように変化してきたか。

RQ.2：日本語学習者の発音に対する自信が変化した場面や要因は何か。

RQ.3：日本語学習者の発音に対する自信の変化は、口頭コミュニケーションに対する意欲にどのように関わっているか。

## 第2章 先行研究

第2章では、本研究に関連する先行研究を述べ、「本研究の位置づけ」と「本研究における用語の定義」を行った。

まず、日本語教育における音声教育に関する先行研究を引用し、千(2017)や戸田(2011)によって「音声を自己実現の手段として捉える日本語教育」(千, 2017, p. 44)についての研究が行われていることを述べた。そして、学習者が「音声による自己実現」を果たすために、学習者の音声に対する情意的要因の様相を明らかにしていくことが重要になると筆者の考えを述べた。

次に、日本語教育研究における学習者の情意的要因に関する先行研究を引用し、主に「発音不安」についての研究で「発音に対する自信」がどのように扱われているか、「発音に対する自信」の変化についてどのようなことが明らかになっているかをまとめた。そして小河原(1999, 2001)の研究から、「発音不安」と「発音に対する自信」は互いに関連する事柄であると考えられること、房(2004)の研究から「発音に対する自信」を含む発音に対する意識の変化が、学習者の動機づけやコミュニケーションに対する意識と関係する可能性があることが明らかになっていることを述べた。

最後に、コミュニケーションに対する意欲に関する先行研究として「第二言語における Willingness to Communicate(以下、L2WTC)」についての研究を引用し、Macintyre 他(1998)の研究から、L2WTC に影響を与える情意的要因の一つとしての「自信」は、L2 スキルの自己評価と言語不安から構成される概念であること、野畑(2021)の研究から、「日本語 WTC」(p. 12)に關係する「自信」や「不安」の変化に「日本語能力の認知」(p. 17)が影響している可能性が示されていることを述べた。

「本研究の位置づけ」では、先行研究の課題を述べた上で、本研究では、先行研究でコミュニケーションに対する意識との関わりが示唆された「発音に対する自信」に着目してその詳しい実態を明らかにし、「発音に対する自信」と口頭コミュニケーションに対する意欲の関わりについて考察を行うと述べた。これにより、「音声を自己実現の手段として捉える日本語教育」(千, 2017, p. 44)という立場に立ち、日本語学習者の音声に対する情意的要因という視点から、日本語学習者が自身の音声能力を使い口頭コミュニケーションを行っていくための研究・実践に対して示唆を与える研究になると考えを述べた。

なお、「本研究における用語の定義」では、先行研究を踏まえ、「発音に対する自信」については「学習者が、外国語学習の過程で感じる、自身の発音に対する肯定的な気持ち」と定義するとした。そして、本研究では音声をういた口頭コミュニケーションに焦点を当てると述べた上で、本研究における「コミュニケーション意欲」を、「音声をういた口頭でのコミュニケーションについて自発的にコミュニケーションを行おうとする意思」と定義した。

### 第3章 調査

第3章では、本研究で行った調査について、その方法と目的を述べた。

質問紙調査は、インタビュー調査の事前調査に位置づけられ、調査協力者が発音に対する自信やコミュニケーション意欲に関する自らの経験を振り返る機会とすることと、インタビュー調査対象の選定基準とすることを目的に実施した。調査協力者5名に対しこの調査を行った。

インタビュー調査は、質問紙調査の結果、発音に対する自信とコミュニケーション意欲の変化に対して意識的だと判断できる調査協力者2名に対して、半構造化インタビューを行った。具体的な内容としては、発音に対する自信の変化とコミュニケーション意欲の変化を中心に、学習開始から現在までの経験や意識などを、共通項目に沿って調査した。

分析にはインタビューの文字化資料をデータとして使用し、分析方法は、大谷(2011, 2019)を参考に、SCATを用いるとした。これについて、本研究では少人数の日本語学習者の語りを分析対象とするため、SCATを用いて明示的、理論的に調査協力者の語りを分析し、日本語学習者の発音に対する自信の実態を明らかにしていくことから、SCATが本調査結果の分析方法として妥当だと判断したと記述した。

### 第4章 分析

第4章では、本研究のRQを踏まえた分析観点から分析した結果を「発音に対する自信の変化についての語り」、「発音に対する自信獲得についての語り」、「発音に対する自信喪失についての語り」、「コミュニケーションに対する意欲の変化についての語り」、「発音に対する自信の変化とコミュニケーションに対する意欲の変化の関わりについての語り」に分類し、それぞれストーリーラインの記述と理論記述を行った。そして、分析結果のまとめとして、「日本語学習者の発音に対する自信の変化とその要因」、「発音に対する自信の変化とコミュニケーション意欲の関わり」の2つの観点から分析から得られた構成概念とその関係性を整理した図を示した。

### 第5章 考察

第5章について、5.1では分析結果をもとに考察を行った。そして、5.2では本研究のRQを踏まえながら総合的考察を行った。その結果、以下のような考察結果を記述した。

まず、発音に対する自信について、日本語学習開始から現在まで大きく喪失されることなく学習歴が長くなるにつれて獲得されていく様子が明らかになった。そして、この変化の背景として「(1)コミュニケーション機会の増加と発音に対する自信の獲得」、「(2)日本語学習者の発

音学習意欲と発音学習観」、「(3)発音に対する自信の獲得の度合い」があると考察した。

次に、発音に対する自信が変化する中心的な場面としては「コミュニケーション場面」と「発音に特化した学習機会」が、発音に対する自信が変化する要因としては「発音不安」との関連が見られるものと発音に対する自信に特徴的に見られるものがあると考察した。そして、発音に対する自信の変化の要因は、学習者の日本語学習環境や発音学習観だけではなく、教師の指導観や教育観からの影響を受けている可能性があるとして述べた。

そして、発音に対する自信とコミュニケーション意欲の関わりについては、発音に対する自信がコミュニケーションの「自信」や「不安」に影響を与えた結果、コミュニケーション意欲が変化していると考察した。また、発音に対する自信以外の発音に対する意識もコミュニケーション意欲の変化に関わると考えられるとした。

最後に、発音に対する自信獲得の視点から、日本語音声教育において教師がどのような教育観を持ち、コミュニケーションや発音評価を行うことが必要か議論されることが望まれるとした。一方で、発音に対する自信獲得のためには、学習者が発音の自己評価基準を形成することも重要であると考察した。これに関連して、発音に特化した学習機会やシャドーイングなどの自律的な発音学習が発音に対する自信の変化において重要な役割を持つ可能性を述べた。

## 第6章 結論

第6章では、「本研究のまとめ」、「本研究の意義」、「今後の課題と展望」を記述した。

まず、本研究のまとめとして本研究のRQに対する答えを明記した。その上で、本研究の意義として、「(1)これまで詳しい実態が明らかになっていなかった「発音に対する自信」について、その変化の様子、変化の場面や要因について詳しい記述と考察を行うことができた点」、「(2)発音に対する自信の変化要因には、「発音不安」との関連が見られる要因と、発音に対する自信に特徴的な要因があることが明らかになった点」、「(3)発音に対する自信獲得のために、学習者の中で発音の意識化がなされ、発音の自己評価基準が形成される必要性が示唆された点」、「(4)「発音に対する自信」が学習者のコミュニケーション意欲にどのように関わっているか、日本語学習者の語りから詳しい分析と考察を行うことができた点」の4点を述べた。

最後に、今後の課題と展望として、本研究では発音や日本語でのコミュニケーションに対して意識的でない日本語学習者の「発音に対する自信」や「コミュニケーション意欲」の様相までは明らかにできていない点と、学習者の発音学習意欲や発音学習観、教師の指導

観・教育観と発音に対する自信の詳しい関係までは明らかにできなかった点を挙げた。加えて、今後の展望として、発音に対する自信とコミュニケーション意欲の関係をより詳しく明らかにしていくために、まずは発音に対する自信とコミュニケーションに対する「自信」や「不安」との関係に着目した調査・研究を行う必要があると述べた。

## 参考文献

- 大谷尚(2011)「SCAT : Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」『感性工学』10(3), pp. 155-160. 日本感性工学会
- 大谷尚(2019)『質的研究の考え方—研究方法論から SCAT による分析まで—』名古屋大学出版会
- 小河原義朗(1999)「外国人日本語学習者の日本語発音不安」『言語科学論集』第3巻, pp. 13-24. 東北大学文学部日本語学科
- 小河原義朗(2001)「外国人日本語学習者の日本語発音不安尺度作成の試み：タイ人大学生の場合」『世界の日本語教育. 日本語教育論集』第11巻, pp. 39-53. 国際交流基金日本語国際センター
- 千仙永(2017)「【展望論文】日本語音声教育の変遷・課題・展望—日本国内における教師教育に着目して—」『早稲田日本語教育学』第22巻, pp. 41-60. 早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 戸田貴子(2011)「音声教育と日本語能力」『早稲田日本語教育学』第9巻, pp. 59-65. 早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 野畑理佳(2021)「留学中の日本語学習者の情意要因の観察—コミュニケーション意欲の変化とその要因—」『武庫川女子大学紀要』第68巻, pp. 11-19. 武庫川女子大学
- 房賢嬉(2004)「発音学習におけるグループモニタリング活動の可能性 : 学習者の意識の変化を中心に」『言語文化と日本語教育』第27巻, pp. 129-143. お茶の水女子大学日本言語文化学会
- Macintyre, P. D., Dörnyei, Z., Clément, R., & Noels, K. A. (1998). Conceptualizing Willingness to Communicate in a L2: A Situational Model of L2 Confidence and Affiliation. *The Modern Language Journal*, 82(4), pp. 545-562. <<https://doi.org/10.2307/330224>> (最終閲覧日 2022. 11. 30.)